

激流への、あくなき挑戦！

カナディアン・スラローム (C-1 クラス)
現ナショナルチームメンバー、
アトランタオリンピック元日本代表

もちだ まさなり
持田雅誠 選手



第二話 いざ、ドイツへ！

カヌー競技、カナディアン・スラロームのアトランタオリンピック元日本代表で、B & G財団の事業にもご協力いただいている持田雅誠 選手に、世界へ羽ばたくまでの経緯やエピソード、今後の抱負などを、連載で語っていただきます。

今回は、カヌーとの出会いや国内レースへの参戦までをご紹介しますが、今回は、持田選手が「神様からの贈り物」と語った、多摩川での国際大会出場の話から始まります。

カヌーの波がやってきた

大学1年生のシーズンオフにカナディアンカヌーのおもしろさを知り、2年生になってからのシーズンは、もっぱら C-1 (カナディアンカヌー・スラローム競技種目) に出場するようになりました。国内の競技は、よく四国や琵琶湖の近くで行われましたから、ボロ車にカヌーを積み、サークルの部員が交代で運転しながら現地に向かいました。学生でお金がないから、なるべく高速道路を使わないようにしましたね。当時、橋もありませんでしたから、四国の大会のときは1日がかりの遠征になりました。こんな競技生活も、学生の頃だったから楽しいものでしたけどね。

私は個人主義的なところがあるので団体生活はあまり好きじゃないんですが、合宿に入ると10畳一間に25人ぐらいが寝ていました。食事はといえば、25人分のご飯を一気に炊いて、カレーや麻婆豆腐など、安上がりなおかずを作ったものです。体育会の部活と違って、サークルの全学年の部員が交代で炊事を行い、理不尽な仕事を先輩が下級生に押し付けるといったこともありませんでしたから、私のような体育会育ちではない人間でもやっていけました。また、遠征費用はアルバイトで稼ぎましたが、カヌーって道具さえあれば、あまりお金は掛からないものなんです。サークルの活動で必要なものといえば食事代と足代ぐらいのものでした。実に気軽にできるスポーツなんです。

ただ、こうした、どこにでもあるようなサークル活動とは別に、大学2年生になった1992

年には、私のカヌーライフを変えるととても大きな出来事がありました。私たちのサークルが日頃の練習に使っている多摩川上流、御岳というところでスラロームの国際大会が開かれたのです。これは、多摩地区が神奈川県から東京都に移管されて 100 周年を記念する「多摩ライフ 21」というイベントの一環として企画されたもので、92 年にプレ大会が、93 年に本大会が行われるという内容でした。

国際大会ですから、当時のワールドチャンピオンをはじめ世界のトップ選手が 15 人ぐらい集まる一方、国内の選手は予選だったら誰でも出場できました。当時、カヌー連盟は各種目の国内 1 位の選手にしか海外遠征を認めておらず、ほとんどすべての選手が外国勢との競技を経験していませんでしたから、こんなチャンスはめったにありませんでした。私は「地元で国際大会なんて、これは神様の思し召しだ」と心のなかで叫びました。

カヌー競技は、1972 年のミュンヘンオリンピックでエキシビション競技として行われ、その後、ようやく 1992 年のバルセロナオリンピックで正式種目に採用されました。そんなこともあって、「多摩ライフ 21」の国際大会は、ちょうどカヌー競技が盛り上がりを見せはじめたときのイベントだったのです。私のカヌーライフも、そんな波に押されながら前に進んでいった感じでした。

次元の違う世界

世界のトップ選手たちの走りぶりはビデオで見ただけで知っていたつもりでしたが、実際に彼らのパフォーマンスを目の当たりにしてあ然としました。レース運び、テクニクがまるで違うのです。それまで私たちがしてきたものとは、まったく次元が違う世界でした。

どこがどう違っていったのか、それを言葉で説明するのはとても難しいことですが、まず体が違っていました。私たちと背丈は同じぐらいなのですが、これが人間かと思うほど筋肉がついてがっしりしていました。ただ、カヌーのスラローム競技は、他のスポーツに比べて身体的なアドバンテージは求められません。もっとも必要なのはテクニクであって、いくら体が良くてもワザが身についていなければ話になりません。そのテクニクも、細かいところで 1 つ 1 つ、私たちとは比べ物にならないほど磨かれていました。何度も言うようですが、どのようにワザが違うのかということを口では説明できません。これはいまでも同じで、後輩選手に「ここを、こうするんだ」と教えても頭だけでは理解できません。要は、環境が違いすぎるんです。彼らは子供の頃から競技をしていて、知らずのうちに時間をかけて自分に合ったワザを習得しているのです。

そもそも、同じスラロームでも、彼らが競技をする水面は日本とはまるで違います。2003 年にフランスで行われた世界選手権では、オリンピックを連覇したチェコの選手が沈をしてしまいましたが、このときのコースを一般の人が見たら、これがカヌーで繰り出す川かと思うことでしょう。そんな激しい濁流のなかを彼らは平然と出ていきます。ちなみに、この大会に出場した日本の選手は肩の骨を折りました。流木やカヌーの縁に当たったのでは

ありません。覆いかぶさる波に圧されて折ったのです。

おそらく、国体など日本の大会では、「こんなところでは、危険だから競技はできない」と各県の監督やコーチが口を揃えると思いますが、カヌーの歴史が違うのだから仕方のないことなのかもしれません。ただ、国内競技をつつがなく行っているだけなら、それでも構わないと思いますが、オリンピックやワールドシリーズ、世界選手権といった国際レベルの大会を目指すのなら、意識を変えなければ絶対に勝てません。

話を戻しますが、そうしたハードな競技を戦い続けている世界のトップ選手たちと、イベントの大会とはいえ地元の多摩川で交流できたことは大きな刺激になりました。世界選手権で5回優勝した選手からジャケットをもらったりして単純に喜んだりもしましたが、いざ競技となれば、とても気さくに話しかけることなんてできませんでした。レベルが違う本物の選手たちですからね。ただただ、尊敬の眼差しで見つめるだけでした。

そんななか、93年に行われた本大会では、当時の世界チャンピオンとそのコーチから直々に教えてもらうことができ、そのうえドイツのコーチからは「ウチに来れば面倒をみてやる」と声を掛けられました。それはもう、すぐにでも行きたいと胸を躍らせました。

考えが甘かった！

ドイツには、翌1994年の春に、同じく声を掛けられた2人の選手といっしょに向かいました。実は、この年の秋に愛知県でワールドシリーズの最終第5戦が開かれることになっていたもので、ドイツで指導を受けながらヨーロッパ各地で行われるワールドシリーズを転戦し、日本に戻って最終戦に臨むというスケジュールを組むことができたのです。

私の親は、「大学は、どうするつもりだ」とは言いましたが、渡航費用は出してくれました。もしかしたら私がオリンピック選手になるかもしれないという期待があったようで、カヌーに関しては反対しませんでした。もっとも、このとき私としてはオリンピックなんてあまり考えてはいませんでしたけどね。カヌーに出合ってからというもの、実にめまぐるしい生活を送るようになっていたので、そんなことを思う余裕なんてなかったのです。カヌーに夢中になったのも、オリンピック選手になりたいからではなく、アドベンチャーがしたかったという、単純な理由でしたからね。ドイツへ渡ったのも、激流を難なく乗りこなす世界の選手たちと同じ環境に身を置いてみたかったからなんです。

ドイツでは、私を含めて3人の日本の選手が一軒の家を借りて共同生活を送りました。想像していたとおりドイツの練習環境は最高で、なんと私たち日本人はドイツのトップ2人といっしょのチームで練習することができました。3位以下の選手たちは、トップ2の後に時間をずらして練習していましたから、これはもう別格扱いです。

私たちを誘ってくれたドイツのコーチは60歳のベテランで、カヌー競技の普及を世界レベルで考えていたようでした。当時、カヌー競技はやっとオリンピックの正式種目になったばかりでしたから、日本などのカヌー後進国を積極的に指導しながらオリンピックをな

んとか永續させたいと願っていたのだと思います。

もっとも、そうした好意に私たちがどれだけ応えられたかは分かりません。先にも述べたように、カヌーのテクニックは頭だけで理解しようとしても、体がついていかなければ身に付きませんから経験を重ねる時間が必要です。また、ここでの練習は2分間全力でコースを走ったら、ふたたび上流まで戻って漕ぎ出すというインターバルを1時間続け、それを1日に2回行います。計2時間の練習ということになりますが、残りの時間は体を休めていないとトップレベルの選手でも体が持ちません。いくら他のスポーツに比べて身体的なアドバンテージが求められないとはいえ、ヘトヘトに疲れる毎日を送るなかで体力的に話しにならないことを痛感させられてしまいました。

いまさらながら、自分の考えが甘かったことに気づきましたが、誘ってくれたコーチに背を向けて日本に帰るわけにもいきません。ドイツのコーチはプロですから、サッカーのように成果が上がらなければクビになってしまいます。私たちのコーチはナショナルチームのトップ2を見ているわけですから責任は重大です。ここで私たちが彼の足を引っ張るようなことはできません。

そこで気持ちを入れ替え、なんとか練習についていくと、日増しにワールドシリーズの初戦が近づいてきました。

※続く